

月亡らさずの

徒桠けんしん

Story by Tadanu Kenshin

Illustration 魔太郎

本編抜粋試し読み
* 柏木さんの日常編 *

フ
オ
ー
ク
ロ
ア
。

St.1

月のない夜、
あるいは
悩めるうさぎ。

終業式の日放課後。

「伊岐くん、どうだった？」

隣席の級友がにこにこ微笑みながら話しかけてくる。

「ぼちぼちかなあ？」

朔は笑顔で隣席の級友に通知表を手渡した。

朔の隣席に座るのは器量よし性格よしのお嬢様、クラ

スで一、二を争う美少女と名高い柏木^{かしわぎ}だ。体つきは華奢^{きゃしゃ}

で胸はささやかだが、それはそれで一部には高い需要がある。

柏木は差し出された朔の通知表に目を通す。

「伊岐くん、相変わらず成績いいね。英語だけちよつと

……だけど」



柏木は朔の痛いところをオブラートに包むように優しく突くと、朔に通知表を返した。

「朔、俺のも見てみるよ」

「ん？ どれどれ」

背が高く、チャラそうな外観の山田やまだが躊躇ちゆうちよなく通知表を差し出してくる。

「うわあ」

思わず朔は声をあげた。

酷ひどい成績だ。何と言っているのか逡巡しゆんじゆんしながら山田の顔を見ると、どこか誇らしげな表情をしている。

「今回はなんと！ ぎりぎり追試と補習は免れたぞ！」

「お、おう。おめでとう？」

褒められてまんざらでもなさそうな山田が柏木にも通知表を見せる。

さすがに人のいい柏木でもフォローできず、柏木は「えっ、えっ……?」と慌てていた。

こんなふうにも、一学期の終業式が終わる。

成績が良かったものも悪かったものも、みんな明日から始まる夏休みにわくわくしていた。

「伊岐くん、文系と理系、どっちに進むにしても、英語は大切だから頑張らないとだね?」

柏木が笑顔のまま、両手をきゅっと握って朔を励ます。

「そうなんだけど……。英語ってなんか苦手で」

「英語は単語を暗記して語彙ごいを増やせば何とかかなると思

うよ？　伊岐くん頭いいんだから」

そういう柏木の英語の成績はかなり良い。

「なんなら、夏休みに私が英語を特訓しても——」

「朔は親父さんの跡を継ぐんだろ？　成績なんてどうで

もいいじゃん！」

何か言いかけた柏木に被^{かぶ}せるように山田が言った。山

田は追試を免^{まぬか}れてずっとご機嫌だ。

このままご機嫌に夏休みに突入し、宿題を全部無視するつもりなのだろう。

少なくとも去年、一年生の時はそうだった。

「継ぐかもしれないけどさ。継がないかもしれないし。

どっちにしても大学は卒業しておいて損はないかなっ

て」

「そうかあ。そういえば朔の家、今朝けさの二ユースに出てたぞ！ 格は高いけど勢力弱小って」

悪気はないが失礼なのが山田の特徴だ。

「……山田くん？」

柏木がたしなめる。

「ありがと柏木さん。でも気にしてないよ。実際そうだし。弱小だからこそ、いつまで持つかわからないし、大
学行っっておいた方がいいかもってのもあるんだ」

朔が遠い目をしてそう言うと、山田は腕を組んでうん
うんとうなずいた。

「神も大変なんだなあ」

柏木も遠い目をする。

「最近では食料も輸入品が多いもんね……」

「そうなんだよ」

月夜見は月、夜、生と死、そして時と季節の神だ。

季節の神ということでは農耕神の側面もある。側面というよりメインと叫ぶ方がいかもしれない。

農業人口が減るにつれ、月夜見一家の勢力も衰退のすいたい途だ。

「ほとんどの神人は神衆組織に属さないで人間として暮らしている時代だしな。人としての生活力みたいなのは大切だし。神人も金がなければご飯を食えないわけだから」

神衆組織に属さない神人には二種類ある。

一種類目は人として真面目まじめに働いて暮らしている神人だ。多くの神人は使える神力も雀の涙で肉体強度も人程度だから当然だ。

もう一種類は人としての仕事を得られずに、ごろつきのようなことをしている奴やつらだ。今朝のはぐね犬神もきつとその類たぐいに違いない。

大学を出ていれば月夜見一家が破綻しても、ごろつきにならずに人として生活できる可能性が高まるのだ。

山田がつぶやくように言う。

「うちも親父が子会社に出向になつてさ。家のローンもあるし、大学行くなら国公立以外だめだって言われちゃ

「ったんだよね」

「「えっ？」」

朔と柏木が同時に声をあげた。

「じゃあ、山田進学できないじゃん。その言葉を何とか二人とも飲み込んだ。」

「大学入れなかつたら、朔の家で雇ってくれよ！」

山田は笑いながら言う。

「い、いやあ。うちはどうかなあ」

朔は返答に困った。

月夜見一家は企業ではない。一般的な就職とはそもそも違うのだ。

総長を疑似的な親と仰いで、絶対服従。親がしろと言

えば黒いものもしろ。死ねと言われたら死ななければならぬ。それが神衆組織というものだ。

山田はいい奴で信頼できる奴だが、月夜見一家になじめるとは思えない。何より山田は人間だ。

「わ、私も、もし大学入れなかつたら、伊岐くんの家で雇ってもらおうかな……？」

「いや、逆にそれは天地が引っくり返ってもありえないでしょ？」

朔がそう突っ込んだところで、

「まな板、邪魔」

突然白が柏木をどかして割り込んできた。

目をやると、うさ耳をピクピクさせながら、じつと朔

を見つめてくる。

何か言いたいことがあるのだろう。ピンと来た朔は白に向かつて声をかけた。

「白は成績どうだった？」

ふんすと鼻息を荒らげると、白はおもむろに朔に通知表を差し出した。

朔はゆっくりと、白の通知表を開く。

——すべて十だった。

もちろん十段階評価でだ。朔たちが通う月宮市立月宮高校は曲がりなりに進学校だ。オール十はなかなかとれるものではない。

「おー、白は流石さすがだな！」

朔が感嘆の声をあげると、白の顔が紅潮する。鼻息がますます荒くなつた。短い尻尾もぴんつと立っている。そして座っている朔に向けて頭を突き出す。撫なでるということなのだろう。とても可愛かわいい。

「白はほんとすごいな」

そう言つて、うさ耳とうさ耳の間を優しく撫でる。

「ふへへ」

白の声が漏れた。耳はピクピク動き、尻尾の揺れも最高潮に達している。

「稲羽さんも進学希望なの？」

柏木がたずねる。

「……そう」

せっかくの撫でられタイムを邪魔されたと思ったのか、白は不機嫌に返す。

「い、稲羽さんは、稲羽一家継がないのかな？」

「決めてない」

「そ、そっかー」

柏木はちよつと怯おびえたような口調になった。

山田がポンポンと、どこか憐あわれむように柏木の肩を叩く。

「朔。そろそろ時間」

どうしたんだろうと思っっていると、白が袖を引っ張った。

「あ、ああ、そうか。そういえばそうだったね」

放課後、職員室に顔を出せと言われていた。遅刻の件

だ。朔とは逆に白は皆勤賞で褒められるために呼ばれている。

山田が笑う。

「叱しかられて来いよ」

「おう、叱られてくるわ！ 山田も、宿題はちゃんとやれよ！」

「休み中も暇だったら連絡しろよな！」

「おう、わかったわかった。柏木さんも、帰り道気を付けてね」

「！ う、うん。ありがとう。伊岐くん」

ぶんぶん手を振る柏木と山田と別れて、朔と白は教室を後にした。



モブの柏木さんも大活躍（しない!!）

本編もよろしくお願ひします。

●月とうさぎのフォークロア。

St.1 月のない夜、あるいは悩めるうさぎ。

●著：徒塾けんしん ●イラスト：魔太郎

●本体価格 600 円（税込 648 円）

●2016年12月15日発売